

悪役貴族に転生した僕  
破滅回避したいので

# 水魔法 を極めます!

Soratsuki Sorara

空月そらら

Illustration : 田所哲平

# 登場人物紹介

## フェル

もふもふな毛を持つ狼の魔物で、リウスたちディナトス家のペット。



## エレノア

リウスの姉。闇魔法の使い手で、原作ゲームでは悪役令嬢になる予定。



## リウス

前世でブレイしていたゲームの悪役貴族に転生した本作主人公。破滅ルートを回避するべく奮闘中。



## ルージュ

リウスが学園見学の際に出会った、伯爵家の令嬢。



## グスト

リウスたちの父親で、ディナトス辺境伯家の当主。



## クラリス

愛情あふれるリウスたちの母親。



## リリア

リウスたちを温かく見守る、ディナトス家のメイド長。



## 序章 悪役貴族の目覚め

信号が赤に変わる。

雑踏の中、僕はただそれを見つめていた。

行き交う人々は誰も彼もが同じ無表情で、僕もその中の一人に過ぎない。

「帰ったら、ゲームの続きでもしようか」

そんな、ありきたりな独り言を吐き捨てて足を進める。

大学の講義は退屈で、友人との会話は上滑りするばかり。

僕の人生は、まるで色のない映画のようだった。

家庭は高学歴とエリートという、価値観に支配されていた。

それは両親が果たせなかった夢の押し付けであり、息子への愛情などではなかった。

家族からの愛情は、常に成績優秀な妹にだけ向けられていた。

僕はただ、自由に夢を追ってみたかっただけなのに。

信号が青に変わる。一步、足を踏み出した、その瞬間だった。

けたたましいブレイキ音と、視界を白く染め上げるヘッドライト。

全身を突き抜ける骨が碎けるような衝撃——  
不思議と、後悔はなかった。  
僕の人生に、愛などなかったのだから。  
そして僕の意識は、完全に途絶えた。

◇ ◇ ◇

意識が白濁した底から浮上した時、最初に訪れたのは奇妙な浮遊感だった。  
自分の体が自分のものではないという、強烈な違和感が纏わりつく。  
重い、いや違う。

まるで水の中にいるかのように、手足の感覚がひどく曖昧でもどかしい。

「う……………」

声を出そうと試みたが、喉から漏れ出たのは意味をなさない赤ん坊のか細い音だけだ。

どうなっているんだ。僕はさっき、交通事故で死んだはずじゃなかったか？

混乱する思考のままゆっくりと目を開くと、見覚えのない豪華な天蓋が視界に飛び込んできた。  
繊細な刺繍が施されたカーテンが、窓からの柔らかな光を遮っている。

ふかふかのクッションと肌触りのいい絹のシーツが、僕の小さな体を優しく包んでいた。

どうやら、僕はベビーベッドに寝かされているらしい。

小さな体は重く、手足も思うように動かない。

その感覚に戸惑っていると、ふと意識を取り戻す直前の記憶が蘇った。

女神を名乗る人物が、僕にこう告げたのだ。

『あなたを、異世界へと転生させます』

その女神の一言と共に、視界は暗転した。

次に目を覚ました時にはこの有様。

小さな体、動かない手足。どう見ても赤ん坊。

まさか、本当に転生してしまうなんて。

眩暈とした声は、やはり「あー、うー」としか言えない。

なんて無力なのだろう。手足を動かす自由も、言葉を話す力も、今の僕にはない。

焦りともどかしさに身じろぎすると、すぐそばから鈴を転がすような優しい声が降ってきた。

「あら、リウス。目を覚ましたのね。寒くないかしら？」

声に引かれてそちらを見ようとしたが、首が思うように動かず、視界の端に美しい女性の姿が映った。

緩やかにウェーブのかかった長い金髪に、落ち着いた色合いの上品なドレス。穏やかな微笑みを浮かべている。

彼女が僕の頬ほおにそっと触れる指先は、驚くほど温かかった。

この人が、僕の新しい母親なのだろうか。

その愛情に満ちた眼差まなざししに、胸が締め付けられるほど熱くなる。

これが、母親の温もりというものか。

前世の両親は、僕にこんな目を向けたことなど一度もなかった。

彼らにとつて僕は期待に応えるべき成果であり、慈しむべき息子ではなかったからだ。

本当に愛されていたのは、いつも優秀な妹の方だった。

だからこの温もりは、僕が生まれて初めて知る、本当の愛情だった。

「まあ、可愛い。リウス、私がわかるの？」

母は嬉うれしそうに目を細める。

僕が何かを伝えたくて口をばくばくさせると、彼女はさらに愛おしそうな表情になった。その時、

もう一人、別の影が僕の顔を覗のぞき込んできた。

「お母様、リウスが起きた！」

弾むような、愛らしい少女の声だ。

ふわりと揺れる紫色の長い髪。宝石のようにきらめく紫の瞳。

年齢は五歳くらいだろうか。

顔立ちは幼いながらも驚くほど整っており、将来は絶世の美女になるに違いない。

彼女はきやつきやと無邪気な声を上げ、僕のぶにぶにした頬を柔らかな指でつついてくる。

「リウス！ 私の可愛い弟！」

「こら、エレノア。そんなに強くつついたら、リウスがびっくりするでしょう？」

リウス、エレノア。

その二つの名前を聞いた瞬間、僕の脳裏に雷が落ちた。

全身の血の気が引いていく。

前世で夢中になってプレイしたゲーム、『王国の英雄』。その物語に登場する、悪役キャラクター

の名前そのものだったからだ。

紫髪の悪役令嬢、エレノア・ルードル・ディナトス。

そしてその弟、リウス。

黒髪のシヨートヘアに、赤い瞳が印象的な少年。

才能に驕おごり努力を怠おこたり、やがて破滅する運命だ。

僕が、その哀れな悪役だったって？ 嘘うそだと言ってくれ。

必死に周囲を見渡すと、少し離れた場所に筋骨隆々で厳格な雰囲気まなづかひの男性が立っていた。

威圧感はあるが、その瞳の奥には確かな家族愛が宿っている。

あの人が、ディナトス辺境伯家の当主、グスト。僕の父親だ。

「リウスよ、元氣そうだな」

父は豪快に笑うと、僕の小さな手をその大きな武骨な手でそつと握った。間違いない。母、姉エレノア、父。そしてこの豪華な部屋。

ここは王都から北東に遠く離れた、ディナトス辺境伯領だ。

原作でのディナトス家は、やがて来る動乱の中で様々な破滅フラグを立てていく。まず、悪役令嬢であるエレノアは七歳で学園に入学。

けれど闇魔法の使い手というだけで周囲から距離を置かれ、次第に心をすり減らしていく。そして学園を卒業後、彼女はその力を悪い方向へ使い始めることになる。

そんな彼女の心を一時的に救ったのが、王太子との出会いだっただけ。美貌と才能を認められ、やがてエレノアは王太子の婚約者となる。

……が、最後には婚約破棄。

王太子は聖女と結ばれ、エレノアは自暴自棄になって暴走する。

そして聖女と真つ向から対立し、粛清されて——全てを失う運命だ。

それが、原作での姉の破滅ルート。

しかも僕——悪役貴族リウスも、同じく学園で数々の問題を起こし、家の名誉を地に落とす運命。僕を粛清するのは、聖女の妹であり、剣聖のスキルを持つ主人公だ。

そんな結末、冗談じゃない。

目の前にいるこの人たちは、僕が前世で渴望してやまなかった、本物の家族だ。

こんなにも優しく、僕の存在そのものを喜んでくれている。

この温かい時間を、二度目の人生で手に入れた愛を、失ってしまえるか。

赤ん坊の僕に何ができる？

まだわからない。でも、やらなくては。

前世の記憶を持つ僕がいる以上、無為に滅びの道を歩むなんて、まっぴらごめんだ。

「……あう！」

僕の口から漏れたのは、決意とはほど遠い、ただのうなり声。

それでも心の中では、燃えるような誓いを確かに立てていた。

この運命は、僕が必ず変えてみせる。

そんな僕の決意を知る由もなく、父は満足そうに頷いた。

「ふはは、リウスもエレノアも元気なのが一番だな。そうだろう、クラリス？」

「ええ、もちろんよ、あなた。二人とも立派な貴族に育てましょうね」

母の言葉に、エレノアも元気よく頷く。

「リウスは私が守ってあげるんだから！」

そう言って彼女はもう一度、僕の頬に優しく自分の頬をすり寄せた。

こんなに穏やかで、愛情に満ちた家族が悪役だなんて本当に信じられない。

だけど、原作ではみんな、少しずつ歪んでいった。

そのことを知っている僕になら——運命を変えられるはずだ。  
僕がこの手で、みんなの未来を、この幸せな時間を、守り抜いてみせる。  
悪役貴族リウス・ルードル・ディナトスとしての二度目の人生は、こうして固い決意と共に幕を  
開けたのだった。

◇ ◇ ◇

あれから数日、僕は相変わらずベビーベッドの中で過ごしている。  
ミルクを飲んで眠り、目が覚めれば母やエレノアにあやされて、また眠る。  
その繰り返しだ。赤ん坊なのだから仕方がない。

だが、前世の記憶を持つ大学生の僕にとって、この状況は退屈を通り越して一種の拷問に近  
かった。

このままではダメだ。なんとかしなければ。

頭の中では、破滅の運命を回避するための計画を練り続けている。

エレノアは、数年後には王都の学園に入学し、そこで心が歪んで悪役令嬢になる。

父は、原作だとフロステル村で起きた災害の責任を問われ、冷酷非道な領主という汚名を着せら  
れてしまう。

そして僕自身も、幼少期の才能に胡坐をかき、努力を怠った結果、無様に堕ちていくのだ。

僕を持つ原作知識はあくまでも、主人公視点で語られた物語ではない。

おまけに、この世界ではいずれ魔王が復活する。もしかしたら、その封印はもう解けかかってい  
るのかもしれない。

そんな壮大な破滅フラグを前に、今の僕にできることはあまりに少ない。

手足は短く、言葉も話せないのだから。

「ふあ……うー……」

意味のない声が漏れる。

お腹が空いたわけでもないのに、心が満たされない。

そんなことを考えていると、優しい歌声が聞こえてきた。

僕の世話係であるメイド長、リアアが子守唄を口ずさんでいる。若いながらも屋敷を仕切る姿は  
頼もしいのだが、原作のゲームでは彼女はあまり登場していなかった。

水色のロングヘアが、窓から差し込む光を受けて、きらきらと揺れている。

「リウス様、スヤスヤおやすみになって……」

その穏やかな声は、僕を心地よい眠りへと誘う。

しかし、眠っている場合じゃない。

僕は今、行動すべきタイミングを探しているのだ。

先日、エレノアが部屋の本棚に、魔法書らしきものをしまっているのを見た。あれはきつと、貴族の子女が学ぶための教科書に違いない。

この世界では魔法が使える。ゲームでも魔法はメインシステムだった。

もし僕が魔法をマスターできれば、それは破滅回避の大きな武器になるはずだ。そう考えたら、赤ん坊だからと何もしないわけにはいかない。

幸い、リリアは少し眠そうだ。今がチャンスかもしれない。

僕はベビーベッドの柵をこっそりと掴み、ぐつと体を持ち上げる。

柔らかく、筋力もほとんどない体だが、一歩でも前に進まなければ。

夢中で踏ん張るうちに、どうにか柵をまたぎ、床へと降り立つことに成功した。

ヨチヨチと危なっかしい足取りで、本棚へ向かう。

ほんの数メートルの距離が、とてつもなく遠い。

なんとか辿り着いた時には、もう息が上がりそうだった。

「う、きちゅい……」

情けない声が出るが、ここでへこたれてはいられない。

本棚には大きくて分厚い本が何冊も並んでいる。

その中に『魔法の基礎』と題された一冊を見つけ、両手で無理やり引き抜いた。重い。さすがは貴族用の立派な本だ。

本を床へ落とし、パラパラとページをめくる。

専門用語がずらりと並んでおり、正直、理解が追いつかない。

だが、一部だけ平易な文字で書かれた詠唱文のページがあった。

「ん……え、えいちよう……」

口が思うように動かないまま、頭の中で詠唱文をイメージする。

すると、指先がじんわりと熱を帯びた。

この不思議な感覚は――

そう思った途端、ピリリツと微弱な光が指先から放たれた。

すごい。本当に魔法が存在するんだ。

興奮した瞬間、全身から力が抜けるような感覚があつて、バタリと倒れ込んだ。

赤ん坊の体で魔法を使うのは、想像以上に体力を消耗するらしい。

気を失いかけたところで、メイドのリリアがハッと目を覚ました。

「リウス様!? こんなところでどうなさったんですか……!」

彼女は慌てて僕を抱き上げ、ベビーベッドに戻す。

幸い、本を見ていたことには気づかれなかったようだ。

リリアは困ったような表情を浮かべている。

こうして、僕は初めての魔法実験で限界を知りつつも、確かな手応えを掴んだ。



魔法を使えたなら、破滅回避に活かせるかもしれない。

◇ ◇ ◇

時は流れ、さらに数日。

僕はリアの目を盗んでは、こっそりと書斎へ通う日々を送っている。

魔力を練る感覚にも少しずつ慣れ、最初ほどは疲れなくなってきた。

そして、家族やメイドが部屋を離れた、絶好の機会が巡ってきた。

よし、今がチャンスだ。

僕はいつものようにベビーベッドを降り、本棚へ向かう。

前回はただ光っただけだったが、今回はもう少し発展させた水魔法に挑戦したい。

原作のゲームでも、リウスは水系統の魔法を愛用していたこともあって、思い入れがあるのだ。

魔法書を開き、目的のページを探す。

「みず……あった」

頭の中で、正確な詠唱を何度も繰り返す。

脳内でイメージした魔力の流れを、手の平全体に集めていく。

すると——ぼわん、という軽い感触。

僕の手の平で、小さな水の球体が形をなした。

「で、でちた……！」

できた、と叫びたいのに、まともな言葉にならない。

それでも、興奮が込み上げる。

体は赤ん坊でも、前世の知識があればここまでできるのだ。

僕は水の玉を少しだけ操作する。

球体を丸く整え、形をわずかに変えて遊んでみた。

「すごいでちゅ……」

そうやって見とれていると、急に扉ががちやりと開いた。

ひよこっと顔を出したのは、姉のエレノアだ。

「リウス、今日は私が一緒に遊んであげ……って、え……？」

彼女はそのまま硬直して僕を見つめる。無理もない。

僕の手の平には水の玉が浮かび、ベビーベッドの外で立っているのだから。

心臓が、どくと大きく跳ねた。まずい。完全に見られた。

動揺して、僕は魔力の制御を誤った。

手の平の水の玉が、意思に反してエレノアの方へ飛んでいった。

びしゃり、という音がして、水が彼女の綺麗<sup>キレイ</sup>な頬に命中する。

「わ、わわっ……！」

僕は焦って意味不明な声しか出せない。怒られるかも。

そう思うと、心臓が早鐘<sup>はやかね</sup>を打った。

ところがエレノアは頬にかかった水を手の甲で拭<sup>ぬぐ</sup>うと、戸惑った様子で僕の顔を見つめ、そして、こう言った。

「リウス、あなた……もしかして、天才なの？」

思わぬ言葉に、僕はぼかんとした。

エレノアはじつと水滴の残る自分の手の平を眺め、ぱちぱちとまばたきを繰り返した後、まるで宝物を見つけたかのように、ぱあっと笑顔を咲かせた。

「すごい……まだ赤ちゃんなのに、魔法を使えるなんて！ リウス、あなた……さすがは私の弟だわ！」

彼女は嬉しそうに僕の名前を呼びながら、ドレスの袖<sup>そで</sup>でそっと顔を拭う。

予想外の反応で、僕は拍子<sup>ひょうし</sup>抜けしてしまった。

この姿に、悪役令嬢<sup>あくやくれいじやう</sup>なんて言葉は、どう考えたって似合わない。

……と思った、その時。

エレノアの大きな声を聞きつけたのか、母と父が部屋に入ってきた。

「エレノア？ 一体どうしたの……まあ……リウス!? そんなところで何してるの！」

母が心配そうに近寄ってくると、エレノアは目を輝かせながら、僕を抱き上げた。

「聞いてちょうだいお母様！ リウスがね、水魔法を使えるみたいなのよ！」

「水魔法……？ 嘘でしょう、まだこんなに小さいのに」

「いや、どうやら本当らしいぞ」

父は面白そうに口髭を撫で、母は頬に手を当てて驚いている。

その顔には、戸惑いよりも喜びの色が濃く浮かんでいた。

前世では、親の言う通りにしないと、いつも叱られていた。

正解だけを求められ、自分のしたいように振る舞えば、親に怒鳴られて。

褒められた記憶なんて、ほとんどない。

だからこそ、目の前の光景が、信じられないほど眩しく映る。

純粹な驚きと、喜び。

前世では決して向けられることなかった、温かい家族の眼差し。

僕は、内心でそっと胸を撫で下ろした。

どうやら、魔法を使ったことを責められることはなさそうだ。

むしろ、すごい子ということになるらしい。

姉の破滅フラグを折り、家族を救うには、力が必要なのも事実。

僕はエレノアの腕に抱かれながら、小さな拳をぎゅっと握りしめて決意を新たにした。

よし、赤ちゃんだから甘えず、コツコツ鍛えて将来に備えるんだ。

悪役貴族だろうが、赤ちゃんだろうが関係ない。

僕のやり方で、みんなの破滅を回避してみせる。

そう誓うのだった。

## 第一章 姉のお茶会と小さな騎士

穏やかな日々が、水面を滑るように過ぎていく。僕がこの世界に生まれて、ついに一年が経った。

まだ言葉もおぼつかない赤ん坊ではあるけれど、僕はこの場所で、少しずつ生きている実感を積み重ねている。

そして——そんなある日のこと。

姉であるエレノアが主催するお茶会に、僕も参加することになった。

近隣にある領地の令嬢たちとの交流が目的だという。

もちろん、赤ん坊の僕が自分の足で会場に向かうわけではない。

エレノアの腕にしっかりと抱かれての同行だ。

正直、前世の記憶を持つ僕にとっては、実際の貴族の社交を間近で見られるまたとない機会である。

胸の高鳴りを抑えきれないまま、僕はエレノアの腕の中から庭園を見下ろす。

抱っこされたままの視界に広がるのは、どこまでも華やかな光景だった。

風に揺れる純白のテーブルクロス、陽の光を反射する銀の食器。

色とりどりのドレスを纏った幼い令嬢たちが集い、紅茶とお菓子を囲んで談笑している。まるで可憐な花が咲き誇るようだった。

「エレノア様、本日はお招きいただきましてありがとうございます」

「ええ、来てくださって嬉しいわ。どうぞ、ゆっくりと楽しんでいってちょうだい」招待客一人一人に、エレノアはにこやかな笑みで応じる。

陽光を浴びてきらめく紫色の美しい長髪が、優雅な仕草に合わせてさらりと揺れた。そのドレス姿は、まさに社交界に咲く一輪の薔薇といった風格を漂わせている。

このエレノアが、いずれ悪役令嬢と呼ばれる存在になるなど、今もって信じがたい。その時、一人の令嬢が僕の存在に気づき、目を輝かせた。

「エレノア様、その腕の中にいらっしやるのが、噂の……リウス様ですか？」

「ええ、自慢の弟なの。まだ赤ちゃんなのだけれど、とっても可愛らしいでしょう？」エレノアが誇らしげに胸を張る。

すると次の瞬間、周囲の令嬢たちから歓声が一斉に上がった。

「まあ、素敵ですわ！」

「なんて可愛らしい！」

令嬢たちは頬を赤らめ、両手で頬を押さえている。

赤ん坊の僕に返せる言葉は「あいー」くらいのものだが、これほど注目を浴びると、元大学生の精神を持つ身としてはさすがに気恥ずかしい。

令嬢たちは代わる代わる僕の頬をぶにと突き、小さな手を握ってくる。感情をぶつけてくる令嬢たちに、僕はされるがままだった。

「むー！」

精一杯の抵抗のつもりで声を漏らすと、彼女たちの熱狂はさらに加速してしまう。

白いフリルやリボンに囲まれる光景は、まるでおとぎ話の一ページのようだ。

だが、そんな和やかな空気の中で、一人だけ異彩を放つ令嬢がいた。

ツンとすました表情でこちらを見つめる彼女。

白銀のカールが揺れるたび、冷ややかな気配が周囲に漂う。

確かあの子の名前はミレーヌ。

原作の設定資料に、端役ではあるが載っていたはずだ。

目立つ出番はなかったが、魔法に対する強いこだわりを持つ才女と紹介されていた記憶がある。

そして、この場の話題が魔法教育へと移った瞬間——ミレーヌは、張り詰めた糸を切るような鋭い声を発した。

「エレノア様は、闇魔法を学んでいらつしやると伺いましたわ」

「ええ、それが何か？」

エレノアは小首を傾げる。

するとミレーヌは、あからさまに眉をひそめてみせた。

「闇魔法なんて……主に魔物が使うという、不吉な魔法ではありませんか。貴族の令嬢が学ぶには、少々気味が悪くないですか？」

その一言が、春のように和やかだったお茶会の空気を、真冬のように凍りつかせた。

魔物とは、魔力を持った動物のようなもので、人間に害を及ぼす危険な存在として知られている。体内には魔石と呼ばれる結晶を宿しており、その影響で常識外れの力を持つものや、魔法まで操る個体もいる。

闇魔法は、魔物が最も得意とする系統として有名で、その名を聞くだけで忌み嫌う者も多い。他の令嬢たちは戸惑ったように顔を見合わせ、気まずそうに口をつぐんでしまう。

エレノアの顔から微笑みが消え、美しい紫の瞳が悲しげに揺れるのを、僕は彼女の腕の中から見つめていた。

姉が侮辱された。その事実が、僕の心を強く揺さぶる。

守らなければ。この小さな体で何ができるかはわからないが、それでも。

「あーっ！ うーっ！」

僕は彼女をまっすぐに睨みつけ、ありったけの声で叫んだ。

そして、エレノアのドレスの胸元をぎゅっと強く掴む。

僕の必死の抗議に、全員の視線が集中した。

「まあ……リウス様が……」

「もしかして、エレノア様を庇<sup>かた</sup>つていらつしやるの？」

一転して、令嬢たちから感嘆<sup>かんたん</sup>の声上がる。

僕の行動がきっかけで、張り詰めていた空気がふわりと和<sup>な</sup>らいだ。

ミレーヌは、はっと目を見開く。

自分の言葉が、場の空気を壊してしまったと気づいたのだろう。

頬をみるみる赤く染めながら、きゅつと唇を結び、深く頭を下げた。

「ご、ごめんなさい、エレノア様……！ わたくし、そのようなつもりでは……ただ、少し驚いただけなのです……」

その声は、かすかに震えていた。

魔物が操るものとして知られる闇魔法。

ミレーヌが受けた教育では、それは忌むべきものだと教えられたに違いない。

きつとあの発言は攻撃ではなく、純粹な疑問と戸惑いから出たものだった。

それでも——エレノアは、彼女を責めるようなことは一言も言わなかった。

「いいのよ。あなたは感じたことを正直に話してくれただけ。私は嬉しいわ」

エレノアはそっと微笑みながら、テーブル越しにミレーヌを見つめた。

「闇魔法は、確かに印象がよくないのかもしれない。でもね、私はその力を——人を傷つけるためじゃなくて、守るために学びたいと思ってるの」

そのまっすぐな言葉に、令嬢たちは目を見張り、小さく息を呑んだ。

そして、誰からともなく感嘆の声上がる。

「エレノア様って……やっぱり素敵ですわ。強くて、優しく……本当に憧れてしまいますもの」

令嬢たちは顔を見合わせ、笑みを浮かべながら言葉を交わす。

エレノアは柔らかに頷き、微笑んだ。

「ふふっ……そんなふうにも言ってもらえるなんて、少し照れちゃうわね」

彼女の言葉に、場の空気がふわりと和らいだ。

その瞬間——ミレーヌが、そっと僕に目を向ける。

「……あんなふうにも言ってくれる弟さんがいらつしやるなんて、羨ましい」

それは、集まった少女たち全員の気持ちを代弁するような、素直な眩<sup>くら</sup>きだった。

「ふふっ。でしょう？ リウスは、私の宝物なの」

そう言って、そっと僕の額に手を当てる姉は、世界で一番誇らしげな顔をしていた。

僕は、はつきりと感じていた。

エレノアは、ただ美しいだけじゃない。強くて、優しく、ちゃんと他人の気持ちを受け止められる人だ。

きつと、この姉を、僕が守ってみせる。

そんな決意を固めた時——ふいに、すぐ近くで小さな物音がした。

「わん……」

目を向けると、そこにいたのは白いフサフサの毛並みに包まれた、犬のような生き物。

原作ゲームにおけるエレノアの忠実なペット、フェル。

犬というよりは狼オオカミに近いだろうか。小さな体なのに、その姿は幻想的で、僕は息を呑んだ。

なんだか、聖獣フェンリルに似ている。

聖獣フェンリルは、前世でやり込んだ原作ゲームに出てくる最上位の神獣だ。神殿に祀まつられる四体の守護獣の石柱で、強力な聖魔法を操る存在。滅多に出会えないキャラであり、仲間にできれば最強の相棒になるという設定だった。

一方でフェルは、ただの魔物という扱いだったはずだが……

目の前にいるのは、魔物とは到底思えないほど神聖で、水色の瞳をきらりと輝かせる、可愛らしい生き物だ。

僕は庭に出ることが少ないのもあって、フェルと顔を合わせるのは初めてだった。

「あら、フェル。今は大切なお客様がいらっしやるのよ。邪魔をしてはだめじゃない」

エレノアが優しくも困ったように、フェルの頭を撫でる。

するとフェルは、しょんぼりした様子で耳をぺたりと伏せ「クウン」と悲しそうな鳴き声を上げ

た。反則的に可愛い。

前世で犬好きだった僕にとって、この仕草は致命的な可愛さだった。今すぐにでも、あの白い毛並みに顔をうずめたい。

前世では、犬を飼うことなんて許されなかった。

家族に頼み込んでも、猛反対され続けた日々。

だから、こうして目の前にいるもふもふが、たまらなく愛おしい。

令嬢たちに囲まれるのも悪くないが……今の僕には、圧倒的にもふもふ成分が不足しているのだ。

「あいっ！」

いてもたってもいられずジタバタすると、エレノアが僕の気持ちを察してくれたようだ。

「どうしたのかしら、リウス……もしかして、フェルと遊びたいの？」

その問いに、僕は満面の笑みで「あう！」と元氣よく答えた。

「ふふ、わかったわ。でも、あまり遠くへ行つてはだめよ？ 怪我をしないように気をつけてね」

姉の優しい声に見送られ、僕はふかふかの芝生しほふの上へゆっくり降り降ろされる。

目の前には、待ち望んだ白いもふもふが尻尾しっぽを振っていた。

フェルは嬉しそうに尻尾を振りながら僕のところへ来て、その巨体をかがめて、湿った鼻先をちよんと僕の頬に当ててくる。

「クウン……」

愛らしい鳴き声と共に、フェルはスリスリと僕に体を擦り寄せた。  
ふわふわの毛並みが頬や腕に触れる。

その圧倒的なもふもふに、なすすべもなく心の全てを奪われた。  
これは……たまらない。

「きゃー、可愛い！」

「リウス様、羨ましいですわ！ 私もフェルと戯れたい！」

その光景を見ていた令嬢たちが、黄色い歓声を上げる。

「ふふ、私たちはお茶会を楽しみましょう」

「むう、それもそうね……！」

頬を膨らませながらも、令嬢たちは大人しく腰を下ろす。

そんなやり取りを横目に、僕はなんとかしてフェルの背中にまたがろうと試みた。

僕がバランスを崩さないよう、フェルも体勢を低くしてくれる。

その心遣いのおかげで、僕はなんとか背に乗ることに成功した。

「よち……のれた！」

たどたどしい言葉だが、フェルには通じているのだろう。

フェルはゆつくりと立ち上がり、僕を落とさないよう気を配りながら、テクテクと歩き出した。

「わあ……」

視線がぐつと高くなって、両親やエレノアに抱っこされている時とはまた違った景色だ。

令嬢たちの視線が集中して若干恥ずかしいが、フェルの背中の温かさと頼もしさ、そんな些細な感情を上回った。

そうしてフェルは僕を乗せたまま、お茶会のテーブルから少し離れた場所へ移動してくれた。

令嬢たちがエレノアとの会話に夢中な間に、ちよつとだけ二人きりの散歩を楽しませてくれるらしい。

「きもちい……」

僕はフェルの背を撫でながら、これが噂に聞く癒やしというものかと実感する。

まるでフカフカの絨毯が、意思を持って動いているようだ。

心がじんわりとほぐれていく。

ふと気づくと、背後からエレノアが僕たちを見て、優しい目で笑っているのがわかった。僕が怪我をしたりしないか、心配で見えてくれたのだろう。

「リウス、あまり遠くへ行かないでねー？」

姉の声が遠くから聞こえる。

僕は片手を挙げて「あいー」と返事をした。

フェルの背中でもふもふを満喫しつつ、庭園の端まで来ると、彼は一度立ち止まり、僕を降ろすように腰を少し落としてくれた。

「ここで遊ぼう？」というお誘いのようだ。

僕はゆっくり降りて、芝生の上にちよこんと座り込む。

そしてフェルの体に手を伸ばし、まずは首回りの豊かな毛を、わしゃわしゃと撫でた。

「あい！」

言葉にはならない歓声。

フェルは「楽しいね！」と言いたげに尻尾を大きく振り、楽しそうに舌を出して呼吸をしている。やっぱり、こうして触れ合える時間は格別だ。

前世では叶わなかった、動物と心を通わせるこのひと時は、特別な体験だ。

転生して悪役貴族になり、こんなにもふもふライフを楽しめるとは。

人生、わからないものだ。

僕が背中を撫でていると、フェルはくるりと体をひねって鼻先をくっつけてくる。

僕のほっぺたをぺろりとなめてきて、少しくすぐったい。

「ふふっ！」

自然と笑い声が漏れてしまう。フェルも嬉しそうだ。

お茶会の最中、エレノアに止められてしょんぼりしていた彼も、こうして僕と遊べて満足なのだろう。

僕たちはしばらくの間、そうやって戯れていた。

あまり騒ぎすぎるとお茶会の邪魔になる。

だから、距離を取りつつ小声で遊んでいる感じだ。

それでも遠巻きに令嬢たちがこっそり見て、きゃーきゃー盛り上がっていたけれど。

◇ ◇ ◇

やがてお茶会が一段落した頃、エレノアが歩み寄ってきた。

令嬢たちは、もう帰っていったらしい。

「リウス、フェルとずいぶん仲良くなったみたいね。あら、どこもかしこも毛だらけになってしまつて……もう、しょうがない子」

エレノアは笑いながら、僕の服に付いた白い毛を手で払ってくれる。

ファサファサの毛が舞い、彼女の綺麗なドレスにも付いてしまいがすが、気にする様子はない。フェルも「くうん」と甘えた声でエレノアの足元にすり寄っていく。

拗ねていたけれど、やはりエレノアのが大好きなのだろう。

「ふふ、フェルったら。最初に来ちゃダメなんて言つてごめんね。今日は大切なお茶会だったの」  
そう言つて、エレノアはフェルの頭を軽く撫でる。

フェルは尻尾をぶんぶん振つて、喜びを全身で表現していた。

僕はというと、エレノアにひよいと抱き上げられる。  
まるで大事な人形のように、腕の中に包まれた。

「リウス……今日はありがとうね？ 私を、庇たもってくれて」

ふいに、エレノアが僕の耳元でそう囁ささいた。

頬がほんのり赤く染まっついていて、その表情がたまらなく可愛らしい。

僕は照れ隠しに「あい！」とだけ返事をした。

するとエレノアは、心から嬉しそうにくすつと微笑む。

その笑顔を見た瞬間、どつと力が抜けたように、疲れが押し寄せてきた。

エレノアが、心から笑ってくれた。

その安心感から、ずつと張り詰めていた緊張の糸が切れたのだろう。

フェルとたっぷり遊び、もふもふを堪能たんのうし、令嬢たちにも散々可愛がられた。

そろそろベビーベッドに倒れ込みたい気分だ。

エレノアは、そんな僕の様子を察して、優しく抱き直すと邸宅へ戻っていく。

フェルも、僕たちの後ろから静かについてきていた。

今日のエレノアは、闇魔法のことであれこれ言われて、きつと心のどこかが傷ついたはずだ。

笑っていたけれど、本当は平気なわけがない。

だから、僕はもつと強くなりたいと願った。

魔法の力を手に入れて、エレノアを守る存在になりたい——そう、強く思った。

まだ一歳の僕は、何もできない。

前世の記憶をフルに活かすには、まず、この体の成長が必要不可欠だ。

そんな葛藤かっとうを抱えつつ、僕はエレノアの腕の中でうつらうつらとしていた。

彼女が歌ってくれる小さな子守唄を聞きながら、僕の意識はゆっくりと遠のいていった。

## 第二章 陽だまりのピクニックと、白狼の温もり

お茶会の日から、月日は穏やかに流れた。

僕は、この世界に生まれて二度目の誕生日を迎えた。

二歳になった僕は、もうハイハイで移動するだけの赤ん坊じゃない。

おぼつかないながらも自分の足で立ち、短い言葉なら話せるようになった。

そして、容姿にも少しずつ変化が現れ始めた。

黒のショートヘアに、赤く澄んだ瞳。

体の成長と共に、僕の見る世界も、少しずつ広がっていく。

そんな変化を実感し始めた、ある朝のことだった。

「さて、エレノアが七歳になり、学園に入学することになる。リウスも無事に二歳になったからな。たまには家族全員で、外の空気を吸いに行くのもいいだろう」

「あら、いいわね。ピクニックなんてどうかしら？ 春の草原は、とても綺麗ですもの。お弁当を用意しましょう」

母が優雅に微笑み、その提案に賛同する。

「ピクニック！ 素敵だわ！ リウス、楽しみね！」

エレノアはもちろん大張り切りだ。彼女は嬉しそうに僕の顔を覗き込む。

前世では、家族仲良くピクニックに行くなんて一度もなかった。

いつも両親は仕事で忙しく、たまの休みは妹の習い事の送り迎え。

僕がどこかへ行きたいと言っても、勉強や宿題を理由に、いつも後回しにされていた。

だから、めちゃくちゃ嬉しい。

「ピクニック？ いい！」

僕が舌足らずながらもそう答えると、家族みんながぱっと笑顔になった。

そして、数日後——風が穏やかな、完璧なピクニック日和の早朝。

僕はメイドのリリアに、動きやすい子供服を着せてもらっていた。

「リウス坊ちゃま、準備ができましたら、エレノア様のお部屋へ参りましょう。お洋服を見ていただきたいですよ」

どうやらエレノアが、僕に今日の服を見てもらいたいらしい。

そして彼女の部屋に着くと、大きな姿見の前であれこれと悩んでいた。

「ドレスにしようかしら？ それとも、もう少し動きやすい服の方がいい？」

「お嬢様、ピクニックでございますから、ドレスではなく、こちらの軽やかなワンピースがよろし

いかと存じます」

「それもそうね……リリア、用意してくれる？」

「かしこまりました」

リリアが微笑み、淡い紫色のワンピースを手渡す。

ピクニックに行くだけでも、貴族の令嬢はこんなにきちんと装うものなのか。

前世では、Tシャツとジーンズで出かけるのが当たり前だった僕にとつて、まるで別世界だ。そんなことを思いながら見ていると、着替えを終えた姉がくるりと振り返った。

「お待たせ。どう、リウス？ この服、動きやすそうかしら？」

普段の豪華なドレスとは違う、清楚で軽やかなワンピース姿。

まるで物語に出てくる森の妖精のようだった。

「きれいだね、おねえちゃん」

僕は心に浮かんだ感想をそのまま口にする。

するとエレノアは微笑んだ。

僕に褒められると、彼女はいつも嬉しそうに笑ってくれる。

そして準備が終わり、庭に向かった。

庭先には、父が大きなバスケットを抱えて待っている。

母も薄手のケープを羽織り、いつになく軽装だ。

そして僕たちの気配を察したフェルが、尻尾をちぎればかりに振って走り回っている。

今回のピクニックには、僕たち家族とフェルだけでなく、護衛を兼ねて数名の使用人もついてくるらしい。

もちろん、その中には、剣の腕に長けたリリアの姿もある。

原作ゲームでは、リリアというキャラクターはあまり印象に残らなかった。

だけど、こうして一緒に暮らすようになって、少しずつわかってきた。

彼女はとても強くて、真面目で、芯の強い人だ。

ただし、油断している時によだれを垂らして寝ているのは、ご愛嬌かもしれない。

もしかすると、まだ仕事に慣れていないのかもしれない——なんて、思ったりもする。

「よし、エレノアもリウスも準備はいいか？ さあ、馬車に乗り込んで出発だ！」

父が楽しそうに声を上げる。

青空の下、邸宅の前には白く飾り立てられた馬車が用意され、荷台にはピクニック用のバスケットや敷物がきちんと積まれていた。

「まあまあ、そんなに慌てなくても大丈夫よ。みんな揃っていますから」

母が穏やかに笑いながらそう言って、使用人たちが荷物を整えてくれている間に、僕たちは次々と馬車に乗り込んだ。

木漏れ日が差し込む並木道を、車輪の音が軽快に響く。

春の風が頬を撫で、窓の外に広がる景色が徐々に開けていった。

そして馬車にしばらく揺られた後、僕たちは領内にある、自然豊かな丘に到着した。

広々とした草原では一面に野花が咲き乱れ、蝶がひらひらと舞っていた。その脇を、透き通ったせせらぎがさらさらと音を立てながら流れ、遠くには白い水鳥が羽を休めている池も見える。

まるで絵本の中に入り込んだような、のどかで美しい場所だ。

そして馬車から降りると、青い空がぐつと高く感じられ、そよぐ風が花の香りを運んでくる。

「わあ、なんていいお天気……！ピクニック日和ね！」

エレノアが空を仰ぎながら両腕を伸ばし、嬉しそうに微笑む。

僕も、澄んだ空気が美味しくて、深呼吸した。

「よし、この辺りにシートを広げようか」

父が指示を出すと、リリアを含めた使用人たちが手早く敷物を敷き、バスケットから食器やお弁当を手際よく並べていく。

母は大きな樹の近くに腰を下ろす。まるで一枚の絵のように優雅だ。

そんな母の様子に見とれていると、いつの間にか足元に白いふさがさが寄り添っていた。

そう——フェルだ。

彼は僕の足元をクンクンと嗅ぎ、「遊んで！」とねだっている。

「フェル、一緒に遊ぶ？」

僕が大きな背中を撫でると、フェルは嬉しそうに舌を出し、ふりふりと尻尾を振ってみせた。

僕は首回りの豊かな毛をわしやわしやとする。

「柔らかーい」

この気持ちいい毛並みに触れていると、それだけで心が落ち着く。

前世では決して叶わなかった『もふ活』——『もふもふと戯れる活動』を、今こうして存分に味わえることに、僕は心から感謝した。

エレノアはそんな僕たちの様子を、微笑ましげに見つめている。

「ふふ、リウスもフェルが大好きみたいね」

「うん！」

僕は元氣よく返事をする。

この穏やかな時間が、いつまでも続けばいい。

心から、そう願わずにはいられなかった。

柔らかな陽射しの中で、時間がゆつくりと流れていく。

やがて、父と母がバスケットの蓋を開けると、美味しそうな香りがふわりと広がった。

ぎっしりと詰められたサンドイッチに、彩り豊かなフルーツ、そしてこんがり焼かれた甘いお菓

子たち。

その光景に、僕のお腹がぐうと鳴った。

「リウス、こっちにおいで！」

エレノアの声に応えて、僕は自分の足でよちよちと歩き、大きなシートの上にちよこんと腰を下ろした。

すると、僕の隣にフェルがすつとやってきて、まるで護衛の騎士のようにぴたりと寄り添ってくる。

「では、いただきますか」

「ええ、いただきますよ」

父と母の穏やかな声を合図に、僕たちは食事を始めた。

エレノアは僕のために、スプーンで小さく刻んだ果物をそつと口元へ運んでくれる。

「はい、リウス。あーんして」

エレノアがそう言って差し出したスプーンを、僕はばくりと口に含んだ。

甘みと酸味がじゅわつと広がり、思わず笑みを零す。

「おいちー！」

「ふふ、気に入ってくれたみたいね」

僕が満面の笑みでそう言うと、エレノアは嬉しそうに微笑む。

そんなやり取りを続けていると、フェルが「自分も欲しい」と言いたげに鼻先をチョンチョンと上げた。

「はいはい、あなたはこっちよ」

エレノアはフェルに、肉のジャーキーのようなものを差し出した。

「ワンワン！」

フェルはそれをガツガツと食べて、とても満足そうだ。

太陽の光が暖かく、風が心地いい。最高のピクニックだ。

しかし、僕の隣に座るエレノアの表情が、ふと曇ったことに気づいた。紅茶のカップを手にしたまま、彼女はじつと遠くを見つめている。

その瞳に映っていたのは、きつと——これから始まる学園生活への不安だ。

闇魔法というものが、世間でどう見られているのか。その偏見や誤解を、僕は原作のゲームで知っている。

だからこそ、不安を抱えたエレノアの横顔を、黙って見ていることなんてできなかった。

僕は彼女のドレスの袖を、小さな手で、きゅつと掴む。

「おねえちゃん、だいじよぶー！」

まだ舌足らずな、二歳の僕の言葉。

だけど、そこには『僕がついているよ』という、精一杯の気持ちを込めた。

「わん！」

僕の気持ちを察したかのように、フェルもエレノアの膝に前足を置き、力強く一声鳴く。僕とフェルにじっと見つめられ、エレノアは驚いたように目を丸くした。

そして、エレノアはふっと柔らかい笑みを浮かべる。

「……そうね。ありがとう、リウス、フェル。あなたたちがいてくれれば、私は大丈夫だよ」  
その吹っ切れたような笑顔を見て、僕は心から安堵した。

離れた場所でその様子を見ていた父も、満足そうに頷いている。

リリアもまた、優しい眼差しで僕たちを見守ってくれていた。

そして食事を終えると、母が立ち上がる。

「のんびり散歩でもしてようかしら？」

「そうだな、少し体を動かすか」

二人は笑い合いながら、草原の方へ歩いていく。

使用人たちがついていくので、安全面は問題ない。

やがて、すっかり元気を取り戻したエレノアが僕に手を差し伸べてきた。

「私たちも行きましょう、リウス、フェル。森の手前辺りまで、探検よ！」

「うん！」

「わん！」

フェルは元気よく吠えて、やる気満々の様子だ。  
こうして僕たちは連れ立って草原の奥へと歩いていった。

草原には小さな花がたくさん咲いていて、淡いピンクや黄色の花が風に揺れている。

穏やかな日差しの中、エレノアは僕をしつかりと抱きかかえながら、足元に咲いていた花を一輪、優しく摘んだ。

「リウス、ほら見て。可愛いお花でしょう？ いい香りがするわよ」

「いいにおいー！」

僕は目を輝かせて花に顔を近づけ、ふんわり漂う甘い香りにうっとりとする。

その隣で、フェルは変わらぬ静けさで僕たちの様子を見守っていた。

そのまま僕たちは、草原の小道をのんびり歩きながら、しばらくの間、風の音と花の香りを楽しむ。

そしてふと、エレノアが立ち止まる。

「ねえ、リウス。ちょっとだけ……私の魔法、見てみる？」

「まほう……？」

僕はばちばちとまばたきをして、興味津々で首を傾げる。

「ふふ、驚かないでね。少しだけ——闇の魔法なの」

そう言って、エレノアは花咲く草原の真ん中で両手をそっと胸元に重ね、小さく深呼吸した。

立ち読みサンプル  
はここまで

「――影よ、優しき羽を持ちて、風に舞いなさい 《影蝶舞》」

その眩きに応えるように、彼女の手の平からふわりと、黒い蝶たちが生まれる。まるで夜の欠片かけらをそのまま形にしたような、幻想的な光を纏った蝶たち。

光を吸い込むような漆黒なのに、不思議と怖さはなかった。

「きれい……」

僕は思わず見とれていた。

黒い蝶たちはゆるやかに舞い、僕の頬をかすめるようにして、空へ羽ばたいていく。

「闇魔法って聞くと、怖いとか、危ないとか思われがちだけど……本当はね、こういう優しい力もあるの」

エレノアの声はどこか寂しげで、けれど誇りも滲にじんでいた。

「守るために、誰かを包み込むために。私は、そんな魔法を使いたいよ」

「おねえちゃんなら、なれるよ」

思わず、そう呟つぶやいていた。

エレノアは驚いたように目を見開いた後、ふっと優しく微笑む。

「ありがとう、リウス」

そう言って、エレノアは僕の頭をそっと撫でた。

温かな手の平に触れられた瞬間、胸の奥がふわりと温かくなって、目を細める。

その隣では、フェルが静かに寄り添っていた。

まるで全てを見守るように、優しい瞳で僕たちを見つめ、ふさふさの尻尾を一度だけ軽く揺らす。

その仕草に、僕の心はさらにほぐれていった。

そんな穏やかな余韻を胸に、僕たちは草花の香りに包まれながら、ゆっくりとシートのある場所

へ戻った。

広がる青空、温かな陽射し、そよ風の心地よさ。

全部が温かくて、心地よくて……気づけば、僕のまぶたは少しずつ重くなっていた。

「ふああ……」

大きなあくびが零れる。

そろそろ、お昼寝の時間みたいだ。

フェルも満足したのか、僕の隣にゴロンと寝転がって、お腹を見せている。

その白い毛並みが、魅惑的なもふもふ感をさらに増して見せていた。

僕もゴロンと横に転がり、フェルのお腹に手を伸ばしてももふもふする。

フェルは甘えた声を出しながら、僕の方へ頭をすり寄せてきた。

まるで「もっと撫でて」と言わんばかりだ。

そんな僕たちの姿を見たエレノアが、くすくすと笑う。

「リウス、それ以上ももふしているよ、あなたが毛だらけになるわよ」